

J. A. Hiddleston : *Baudelaire and Le Spleen de Paris*
(Clarendon Press, 1987)

露 崎 俊 和

敢えて『悪の華』集中の韻文詩との比較で言えば、『パリの憂鬱』にとり寄せられた散文詩は読みやすい。読者は数居の高い韻律法を気にする必要はないし、難解な修辭や譬喩に煩わされることもない。しかしこの近付きやすさはそれを対象として語ることの困難さに繋がっている。個々のテキストではなく、その全体的な輪郭を捉えようとするとき、焦点は固定せず視界は曖昧にぼやける。そこに現れる多様な説話の形式に共通の元素なり、支配的な文法なりを見出すことの難しさが『パリの憂鬱』を規定していることは確かだが、『パリの憂鬱』の語り難さはただこのことだけに由来しているのだろうか。

*

ヒッドゥルストンは論考の冒頭で、これまでの研究が『悪の華』に偏りすぎ、『パリの憂鬱』に固有の価値の発見をないがしろにしてきたという反省を述べている。このような反省は、もし或る研究の必要を謳うための常套句の域にとどまるならば、凡庸な使命感につきものの平板さを論説の展開に刻印せずにはおかないだろう。確かに、偏向が存在してきた。しかし、だからこの偏向が是正されねばならず、一冊の書が『パリの憂鬱』に捧げられてしかるべきだということにとどまるのでは、反省の実質がいかがわしいものに見えるのである。われわれは『悪の華』をめぐる言説の過剰と、『パリの憂鬱』に捧げられた乏しい文献との間の著しい不均衡に敏感であるべきかもしれない。だからといって、散文詩についての新たな論究が無条件に価値ありとされるわけにはゆくまい。この不均衡という事態が暗示しているものが同時に問われるのでなければ、つまりわれわれ自身の文学的了解の準拠点でもあれば拘束でもあるような枠組みの認識が付随するのでなければ、散文詩研究は「周縁的なものの復権」といった使命感によって怠惰に自己肯定するにつきる危険を冒すことになるだろう。文学史の偏向を云々するだけではしかたない。なぜ、『パリの憂鬱』が、その広汎な受容にもかかわらず、研究言説の対象とされることが少なかったのかが問われることによって初めて『パリの憂鬱』が孕む問題はわれわれ自身の歴史的現在に通底するものとして浮かび出す。

*

自明であると信じられていることがわれわれの視界を遮っているのだと疑ってみる必要がある。たとえば、本来は操作概念としてある単純な二項対立の図式にボードレールのような詩人の作業を還元してしまう姿勢は『悪の華』と『パリの憂鬱』の関係を厳密に把握することを予め妨げてしまいはしないか。『悪の華』の主題系を近代に巣くった病理的意識の所産であるとみるかわりに、ロマン主義の残滓をひきずっているものと片付けてしまうことは本当に批評の義務をはたしているだろうか。また、〈建築〉という問題

を古典的な＜統一性＞の美学という観念で処理してしまうことは、『悪の華』がその全体において開いてみせるはずの空間を隠蔽する結果を招きはしないか。＜統一性＞或いは＜一体性＞に対する＜多様性＞や＜多義性＞といった口当たりのよい概念で『悪の華』に対する『パリの憂鬱』の差異を定義し、そのより現代的な言語空間を称揚し、連続よりは切断を、相補よりは離反を——ボードレール自身の発言を否定してまで——際立たせることはボードレールが散文詩に委ねていた課題をどこまで精確に把握したうえでのことなのか。つまり、散文諸詩編が体系性の理念への従属を完璧にふり捨てているとして、果たしてそこに生じる多様性は、詩人が詩集『悪の華』によって意図していた試みに全く対立すると言い切れるのか、或いは、別の言い方をすれば、そもそもこの多様性を生じせしめたものは何であったか。

＊

『悪の華』の開示する空間は解体しつつあるロマン主義イデオロギーの空間であるということを忘れてはならない。そこでは、ユートピックな救済という夢想からの覚醒を余儀なくされ、死を内在させた身体感覚をとおして崩壊する共同性の軋みを聴きとりつつある主体が、虚無的な睡魔の誘惑に抗しつつ、或いは薄明のおぼろな形象のうちにまどろむ夢を反芻しながらも、事象の未決性という空間に棲みつき、破局の明証性を引き受ける決意をくだす。ひとつの神話の破産が物語られ、ロマン主義は救済の聖域であることをやめる。世界と自己は完結しうる物語としてではなく、安易な解決を拒む問題群として読みとられることを求める。『悪の華』はこの問題群がとりあえず主体の意識と欲望の場としての＜現在＞という主題によって析出してくる過程でもある。それゆえに、発話は社会的というよりも存在論的な水準に定位されている。『パリの憂鬱』が、ボードレール自身明言しているように、『悪の華』の延長線上にあるとすれば、それは発話の中心的命題が社会的水準へ移行したということを意味している。＜現在＞という存在論的主題は＜現在性＞という社会的主題に座を譲る。そして、これも詩人自身が示唆するように、韻文作品と散文作品がひとつの対応関係を構成するとすれば、それは個の意識における＜現在＞という問題と社会の存立における＜現代性＞という問題が相互に照射しあうからにはほかならない。社会のなかで疎外されてゆく詩人の内部に産出されるさまざまな葛藤が『悪の華』の抒情空間であり、この葛藤を条件づけている社会関係の危機的側面へ向けられた視線が『パリの憂鬱』の説話空間を形成しているのである。

＊

たとえば、『パリの憂鬱』には猫がない。詩の高貴な香りに鼻をそむける無知なブルジョワ公衆に比べられる犬ならいる。あるいは犬族全体が社会の階級構造に対応し、その比喩となる。『パリの憂鬱』は、人間との関係に存在意義を与えられる犬、擬似社会的動物としての犬を語ることによって詩人の社会的視線を語る。しかし、『悪の華』のあの自己充足した存在としての猫、社会性の神話的彼岸に生息する自己完結した自由な欲望の比喩としての猫はこの散文世界には姿を見せない。実際、ボードレールにとって猫は理想の韻文詩の生きた形象でもあったのではないだろうか。調和に充ちた優美な形姿と悦楽を湛えた物憂げな動作は韻律が詩言語に付与する形式と展開の理想であり、その精力を秘めた身体をめぐる流れる欲望は詩的イメージの内発的な奔出と躍動に対応している。そんなふうに考えてみることもできる。逆に、犬は二重の意において＜散文的＞な存在である。韻文よりも散文を受け入れ、散文によってのみ対象として扱われうるブルジョワ公衆と民衆が犬のイメージに等価であった。

＊

ヒッドゥルストンの著書はこれまでボードレールの散文詩について語られてきたことを手際よくまと

めている。英米の研究者にありがちな当世風批評の香辛料をきかせた刺激に充ちた一品（いずれ舌も痺れ、眩暈すらしてくるような代物）とは違って、素材をただ水から煮込んだだけのあっさりとしたポ・ト・フーのような料理と考えればよい。その意味でいわゆる好著に属するものと言えないこともない。三章から成り、第一章＜Art and the Artist＞は芸術の性質や効用、芸術家の立場や権能といった問題群についての、いわば脱ロマン派的反省が散文詩集においてどのように提起されているかを追跡する。第二章は＜‘Une morale désagréable’＞と題され、アナーキーなモラリスト（箴言家・倫理家）としてのボードレール像が吟味され、最終章＜The Poetry of Prose＞においては、ボードレールの散文詩に＜詩＞としての自律性を与えているテキスト構成の特質が考察される。なかでも第一章は作品の主題的多面性に光をあてて十分に読みごたえのあるものとなっている。しかし、後半の二章は、私見によれば、ジョルジュ・ブランによる論究が画定した範囲を脱していない。実際ブランは、『パリの憂鬱』を特徴づけている破壊的・反語的な倫理的反省、形式的制約から解放された散文素材を用いることによって世界の通念的理解をゲリラ的に解体してゆくテキスト戦略、韻律法の自由な転用によって調律された散文によってというよりも、猥雑な騒音の彼方に密やかな音楽を夢み暗示する散文によって与えられる＜詩＞、等々の点をすでに指摘しているからである。

*

著者は『パリの憂鬱』におけるボードレールの芸術観、倫理的言明、テキスト美学を読みとってゆくためのキー・ワードを＜原罪＞という観念のうちに求めている。ところで、この観念と＜道化＞、＜祝祭＞、＜旅＞、＜売淫＞、＜ダンディズム＞等の問題群との連関はついに明示されることがなく、ただ諸々の問題は並列的に提示されるに終始する。

＜原罪＞は確かに、失墜した世界を告発し、ロマン派の楽天的な芸術理念や人道主義を撃ち、テキストのうちに世界の亀裂を顕在化させようとするボードレールの作業の思想的拠点を指示しているといえる。当然のことながら、ボードレールにおいては安易な救済の図式は排除されているし、キリスト教本来の超越的人格神は棄却されている。それは、＜原罪＞というこのカトリシズムの教義に属する観念を養っているものを宗教感情のうちに求める必然はないということにもなるだろう。もちろん、ボードレールは教義を盲目的に受け入れ、悔い改めぬ現代人に警告を発する狂信者などではない（そのふりをするのは詩人特有の韜晦趣味に適っていたかもしれないが）。むしろ、存在と倫理に関する反省がこの観念に先行している。人間存在をその個体的かつ社会的な原点において脅かしている＜欠如＞が問題なのである。神学の形式に拠って存在の起源としての否定性を問題化してゆくことが意図されていたのである。

個も社会も永続的な実体ではないという定式を＜原罪＞という観念から読みとるならば上述の問題群との連関もおのずと示される。個といい、社会といい、それぞれ関係の織り目のなかに仮構されたものであればこそ、＜充実した実体的主観性＞として定立される詩人概念はロマン主義的遺制としての破産を宣告され、虚構を虚構として構成してゆく負の焦点としての主体概念が主題化されてゆく。都市社会という劇場において演じられるのは、欲望の浄化へ向けて自己完結してゆく悲劇ではない。絶えず破綻し、分散し、逸脱しつつある主体の生の審級が瞬間のなかで垂直に組織され、孤独な祝祭のなかで瞬間の結晶が祝われるのである。垂直性とは思考習慣の硬化した表面に切り開かれた裂け目と欲望の深淵を貫く運動であろう。＜道化＞も、＜売淫＞もボードレールにとってこのような瞬時の祝祭の別名にはかならない。自我の拡散と集中という定式もこうしてみれば決して両立不能な対立項としてではなく、主体が作品行為の根源で経験する裂開と蘇生の同時発生として考えられる。

*

裂開＝蘇生という詩的主体の認識と存在をなくずし的に葬ろうとするブルジョワ社会——モノ化され、情性的に君臨する制度の言語——がボードレールのアナーキズムの対象であったことは自明にちかい。われわれが未だに鮮明な映像として把握しえずにいるのは、このアナーキズムが自己目的化された衝動ではなく、しかしテキストの彼方のユートピアを夢想するものでもなく、テキスト生産という両義的な作業をとおして世界の変容に直接に触れるという希望を宿しているということなのである。ただし、世界はその起源においてすでに、ユートピックな調和とは無縁な、多元的に構成された《矛盾のシステム》であり、直接性は、宿命的に、言語という媒介の亀裂をとおしてしか触れえないものである。そこに、世界の美的浄化を拒む散文形式の多様性が生じ、留保なき希望は逆説化する。読書行為という想像的な場、差異の再創造の場において《夢》と《行為》の再婚を達成しようとするテキストの力学こそがボードレール散文詩の深い欲望であった。作品を実体的に規定し、本質化し、永続性のうちに固定しようとするわれわれの学問的欲望のゆえに、それに抵抗し、それを挫く『パリの憂鬱』の差異の欲望は未だに不可視のものとして、語り難いものとしてあるのではないだろうか。《語り難さ》を迂回することなく、そこに社会と文学を横断するひとつの歴史的危機意識を測定することがわれわれに要求されている課題である。